

はじめに

本章においては、「序章」を受けて、価値論の大きな論争点である価値の形態の問題が吟味される。主に、第1節で価値形態論の方向性が垣間見えるマルクス理論の形成過程が辿られ、第2節では本体である価値形態論^{*1}の展開が示されている。大内・価値形態論といえる。

第1節 交換価値と価値形態

本節では、マルクスの価値論形成の過程が、古典派から掘り起こし、『要綱』、『学説史』を経て深化する経緯が検討される。

1 古典派経済学の交換価値

ここでは、古典派経済学の**交換価値**をめぐる理解について、スミスやリカードの主流派に対するベイリーの提起を絡ませつつ整理される。

まず、古典派の主流。「リカードオの理解は、もっぱら**使用価値的側面が捨象**されている点に交換価値の特徴をみるのである。つまり彼は、交換価値を抽象的人間労働の量的比率としてのみ理解するのであって、「商品の価値、すなわちいずれもそれと交換される他の商品の数量は、その**生産に必要な相対的労働**によって決定される。」とのべている。」(127)。これが先生のリカードに対する評価である。通説的な理解と同様である。

それに対するベイリー。「ともかく使用価値がもつ有用性への感情から価値を説明する。従って、ベイリーの交換価値は、使用価値の交換なし選択に関連した感情に基づく、2つの異なった**使用価値の間の相対的な量的関係**であると要約することができるであろう。」

(120) と、ベイリーの議論がまとめられる。これも通説的な理解と同様^{*2}。

こうして最後に、「つづいてわれわれは、以上みてきた交換価値にかんする古典派経済学の2つの見解を巡って、マルクスがいかに批判的検討を展開していくかを追跡することにしよう。」(130)。問題がこのように整理され、マルクス説の検討に進む。

2 『要綱』における交換価値の章

先生は、マルクスの価値論の形成の出発点を『要綱』にみる。マルクスの積極の評価す

*1 価値形態論とは、様々な理解があるが、商品と商品の関係から貨幣を導出する論理だといえる。つまり、貨幣という「物神」が生成される謎を解く論理が価値形態論である。価値形態論は、こうした論理ゆえ、種々の領域にも影響を与えた。例えば、今村仁司『暴力のオントロジー』（勁草書房）、高橋洋児『物神性の解読』（勁草書房）、柄谷行人『マルクスーその可能性の中心』（講談社）、浅田彰『構造と力』（勁草書房）の核心は、全てこの論理に依拠している（もっとも、各論者の価値形態論の理解の仕方に疑問がないわけではないが）。なお、付言すれば、価値形態論の研究が日本ほど活発な国はない。

*2 このような古典派主流とベイリーの議論は、「**価値実念論**」（価値实在論）と「**価値唯名論**」として整理される。前者では商品には価値が内在していると考え、後者では商品における価値はあくまでも相対的なものと捉える。

べき点は以下のようなとする。

「それに対してマルクス自身としては、交換価値を労働時間に還元させながらも、商品の価値と使用価値の矛盾に対応させて、その労働時間を二重の性格^{*3}において捉えるばかりでなく、両者が矛盾している点を指摘することによって、貨幣への必然性を見ようとしているのである。」(144)

「すでにマルクスは、正当にも**商品の二要因、価値と使用価値**を矛盾としたものとして把握し、とくに価値を商品体そのものから、つまり使用価値から独立した存在として、いわば**流通形態的に把握**^{*4}していたのであった。」(145)

だが、マルクスには当時の限界もあるという。

「しかし、その矛盾は、価値形態論の展開として、従って価格の価値からの乖離を伴う運動過程として解決されるものとは理解されなかった。」(145)

「それゆえ**貨幣の必然性**は、価値形態論とは別の見地から、すでに指摘したように単なる二商品の交換、**物々交換（等労働量交換**—引用者）の**想定**に基づいて展開されることにならざるを得ない。すなわち、二商品間の交換において、すでに観念的な労働実体への還元を見ることとともに、現実の貨幣は、交換の技術的困難、もしくは「交換の矛盾」から導出を見たのである。」(145)

「従って、貨幣の必然性は、労働実体によって著しく制約を受けるのであるが、こうした理論構造を支えているのが当時のマルクスの方法的見地であったことはすでに明らかであろう。」(145-6)

⇒つまり、マルクスは、この段階では、一方でベイリーを評価しつつも、他方でリカードなどの主流派から脱却することが出来ていないという訳だ。これも通説的な理解と同様である。

3 『学説史』における価値形態論の提起

まず、「...なによりもまず価値形態論の視角を明確に提起したことにある。」(147)と、『学説史』のマルクスを高く評価する。

そして、ベイリーの主要を認めつつも、「それゆえ、使用価値を自己目的とした商品交換の想定は、共同体内部の単なる生産物交換、あるいは歴史上の単純商品のそれに特有なるものということができる。」(150)

「そして彼（ベイリー）らが、多かれ少なかれ商品交換を**物々交換（労働量を無視した交換**—引用者）に解消し、二つの商品に限定して交換価値を理解するのも、結局は使用価値の重視によって、商品を単なる生産物に回収したからである。」(150)

ここでは、先のリカードとは対照的に、ベイリーが批判されている。

⇒ただ、ここで「**物々交換**」という概念が、先のリカード批判の際と別の意味で用いられていることに疑問を感ずる。つまり、「物々交換」が、等労働量交換と労働を無視した交換との両者に用いられていると思われるのである。

ともあれ、こうしたリカードとベイリーに対するテキストクリティークを前提として、

*3 いわゆる「労働の二重性」を言われるもので、「具体的有用労働」と「抽象的人間労働」をさす。

*4 価値を「流通形態的に把握」するとは、それを労働と切り離して規定すること意味する。

先生の積極説が展開される。

「それに対して商品経済が、もっとも純粹に、かつ拡大した規模で発展する**資本家的商品経済**での商品**は、もはや使用価値を自己目的として交換されるものではない**。一人の**資本家を登場させて、彼の商品の販売の目的**を問えば明らかなように^{*5}、目的は奢侈的欲望の充足でもなければ生活必需品獲得でもない。また生産手段の購買や労働力雇用を究極の目的とするものでもない。それは消費欲望の対象である使用価値と直接関係のない利潤の獲得、つまり価値増殖を目的としているのである。しがって資本主義的商品からすれば、商品**は確かに交換されなければならない**、他人のための使用価値なのであって、その点では価値は、他人の使用価値の一定量で表現されなければならない。しかし、本来、欲望の対象である使用価値とは積極的に区別された目的を持って、つまり全面的な交換を要求するものであって、商品**の価値もまた、そこに設定されなければならないのである。**」(151)

そして、こうした観点から、『資本論』の価値形態の**第Ⅱ形態**である「**全体的な価値形態**」^{*6}が肯定的に評価される。

「すなわち、全体的な価値形態は、無数の数量の使用価値種類による価値表現ではあるが、しかし無数の使用価値種類ということは、いわば無限の使用価値量と同様、**直接・関節の消費欲望を超えた表現**である。いいかえれば、使用価値による表現とは言っても、もはや消費欲望と直結した使用価値による表現ではない。」(153)

以上が、大内理論の核心といえる。

⇒だが、価値形態論の内部に入った検討は次節の課題なので、ここでは先生自身において後(『経済学概論』)にはやや修正がなされている点を指摘しておきたい。

4 価値・価格および労働

この小節では、これまでの総括がなされている。「以上われわれは、古典経済学の交換価値に対する理解と、マルクスによるその批判を巡って、若干の検討を試みた。マルクスの批判は、要するに価値形態論の見地からの批判に成熟したのであって、次第にその見地が明確になっていってといいだろう。そして、この価値形態論の見地は、いうまでもなく交換価値を価値の他の商品の使用価値による表現形態とするものであるが...。」(167)

すなわち...

「価値は、自己の使用価値については言うに及ばず、他人の使用価値をも自己目的とせず、単に使用価値を手段とするに過ぎないものとして、全面的に交換を要求する商品の性格と理解されて、はじめて使用価値と積極的に矛盾・対立した要因となるのではなかろうか。」(169)

⇒ここだけではないが、「価値は、自己の使用価値については言うに及ばず、他人の使用価値をも自己目的とせず、...」というような表現には、違和感を持つ。「価値は、...自己目的とせず...」とはどういう意味か。「価値」というものに、人間のような「意思」があるのか(次にも、同様なロジックが示されるが)。実は資本論研究者では、しばしば、こうした擬人化した表現が用いられるが、それは論理を曖昧にするのではないか、先生にも伺いたいところである。

「マルクスのいうように「X量の靴墨も、Y量の絹も、Z量の金そのほかも、いな1クオ

*5 この価値形態論の次元で「資本家を登場」させるのは、論理の先回りように思われる。

*6 『資本論』価値形態の第Ⅱ形態は、「3 全体的な価値形態」のところで示される。

一ターの小麦の交換価値なのだから、X量の靴墨、Y量の絹、Z量の金などは、互いに置き換えられる、互いに等しい大きさの、諸交換価値でなければならない。…」ということもできるであろう。」(173)

この点は先に見た論理と同一である。

そして、この論理を梃子として貨幣形態が導かれるとい構成になっている。

すなわち、「しかも、この価値形態は、価値が使用価値を自己目的としない**全面的交換を要求**することからいっても、貨幣形態へ必然的に発展しなければならない。」(175)

第2節 価値形態の展開

いよいよ、大内・価値形態論が正面から論じられることになる。

1 価値表現の「回り道」

ここでは、まず、「商品の価値が、なぜ自己の商品では表現できないか…」(181)として問題が立てられる。ここでは、商品の価値が他の商品の使用価値で表現されることを「回り道」*7というが、その謎解きがなされる。

「すなわち、使用価値から区別して商品に価値を積極的に設定できるのは、何よりもまず商品が使用価値を自己目的とせず、全面的に交換を要求する性格を持つからであった。」(182)

「商品の価値が自己の商品体から区別されなければならない以上、またそれによって表現できないことも自明であろう。」(182)。

こうして、価値形態論の第I形態が準備される。

2 単純な価値形態

まず、単純な価値形態（簡単な価値形態、**第I形態**）が示される。

「単純な価値形態は、周知の通り、例えば20エレのリンネル=1枚の上衣という交換方程式によって示される。」(187)

「しかし、先に前提した価値および価値形態の定義からするなら、マルクスの言うように、「最も単純な価値関係」として上記の交換価値方程式を設定することは、必ずしも自明なことではない。というのは、商品の価値を全面的交換を要求する社会関係とすれば、全面的交換ということから言っても、等価形態に単一の商品だけがおかれることは一見不自然に見えるからである。」(187)

⇒これまでの立論（価値の性格を「全面的に交換を要求する」ものと規定すること）からすれば当然だが、それ自身に疑問が生ずる。その点は後ほど。

そしてこの謎解きが示される。

「価値は、上述のごとく特定の使用価値を自己目的としない、全面的交換を要求する社会関係としての性格ではあるが、しかし、それが他の商品の使用価値量によって表現されなければならない以上、等価形態には単独の商品が立つことになる。」(192-3)

「等価形態にたつ商品は、その使用価値量で価値を表現させられるがゆえに、特定の、

*7 いわゆる「回り道」をめぐるのは、久留間鮫造による宇野弘蔵に対する批判から始まって、多くの論争があるが、立ち入らない。

従って個別的な存在でなくてはならず、それゆえ単独の商品でなければならないわけである。」(193)

⇒要するに、ここでは価値が他の使用価値によって表現されなければならない、という要請から、等価形態の商品が1つになるとされる。しかし、「個別的」ではなく「単独」でなければならない理由は希薄ではないか。この点も後には修正されているのではないか。

なお、価値形態論の方法において一石を投じた宇野の「欲望説」が注記の形で批判的に紹介されている。

「以上のごとく、価値を等価商品の使用価値量で表現するという限りで、**商品所有者の欲望**が問題になるが、ただ、次の点はくれぐれも注意しておく必要がある。確かに価値は、使用価値量で表現されなければならないが、しかし、もともと使用価値を自己目的としないう以上、価値表現に際しても、使用価値を自己目的として相互に生活のために交換し合うような意味で、使用価値量が問題になるわけではない。...使用価値量は、あくまで価値表現の素材として、その限りで問題にされなければならないのであって...。」(194)

⇒みられるように、先生は宇野説に対して根本的には批判的である。

3 全体的な価値形態

次いで、**第Ⅱ形態**が検討される。

「価値形態の**第Ⅱ形態**、「全体的な、または展開された価値形態」は、例えば20エレのリンネル=1枚の上衣、または=10ポンドの茶、または=40ポンドのコーヒー、または=2オンスの金、または等々である。」(197)と、まずその定義が示される。

そしてこれが成立する論理が追求される。マルクスの、**2つの論理**(①「**転倒**」と「**総計**」の論理、②**物々交換の「拡大」の論理**)が否定され、**第3の論理**を正しいものと確定する。

すなわち...

「形態Ⅱの特徴を、次のように理解していいであろう。第1に、全面的交換を要求する、使用価値を自己目的としない社会関係を、積極的に表現する価値形態であり、それゆえ第2に、無限の使用価値種類によって表現されなければならない。したがって第3に、それら無数の使用価値に対して、「**選択**」を行っている形態であるとともに、第4には、量的規定も偶然的でなく一定の量的関係を持つ価値形態であることあると。」(206-7)

⇒もともと、この点も後には修正されているように見える。

4 一般的価値形態への移行

先の第Ⅱ形態での**2つの論理**が否定され**第3の論理**が示されたが、ここでもそれが顕揚される。

「要するに、形態Ⅱでは「使用価値の特殊形態に対しては商品価値は無関心」であり、従って無限の商品種類の使用価値によって価値表現が行われる。しかし、ここでも使用価値を離れた価値表現があるわけではない。価値表現は、**個別な異質性を離れるわけにはいかない**のであるが、ここでは無限の使用価値種類で表現されているがゆえに、それは個別的なものの寄せ集め、つまり「**バラバラな雑多な**」「**多彩な寄木細工**」にならざるを得ないというのである。」(211)

そこでその解決が以下のように示される。

「それゆえに、使用価値を自己目的とせず、言い換えれば「**使用価値の特殊な形態**」に

対して無関心な価値対称性の表現としては、「第Ⅱ形態」は一引用者）今なお不十分な形態であって、それゆえ新たな価値形態を要求しなければならないのである。」(212)

⇒ところで、ここでいわゆる「**形態Ⅳ**」*8の問題が論じられ、宇野説に対する批判的な議論が展開されている。もっともこの点も、後に修正されているように見える。

5 一般的価値形態

まず、一般的価値形態（**第Ⅲ形態**）が定義される。

「**形態Ⅲ**、いい換えれば「一般的価値形態」は、いうまでもなく相対的価値形態に立つ諸商品の価値を「単純に」、「ただ一つの商品」の使用価値量で表すとともに、「統一的に」表現する価値形態である。」(217)

そして「マルクスは必ずしも全て同一とは思われない、いくつかの異なった見解を示している。」として検討に移る。

とりわけ、一般的等価物が1つの商品に収斂することが検討されるのである。その際に、先の「**形態Ⅳ**」が利用され以下のような結論が導かれる。

「以上を要約すれば、**形態Ⅱ**から**形態Ⅲ**への移行は、**形態Ⅱ**が「**形態Ⅳ**」を含むものと理解することによって、あらゆる商品が相対的価値形態に立ち、しかも、それらの間に一定の量的比較関係である同質性、つまり価値としての社会的関連の存在が積極的に明らかにされる。しかし、右の点は、いまだ相対的価値形態の側からする**形態Ⅲ**への移行のいわば「必要条件」に過ぎない。われわれは、さらに「十分条件」として**形態Ⅱ**の等価商品がバラバラな寄席細工としての存在にとどまる点を指摘し、それを欠陥とすることによって、なぜ単一の等価物の出現をみななければならないかが明らかとなる。かくして、**形態Ⅲ**への移行は、いわば「必要」かつ「十分」に説明されるのであって、われわれは「転倒の論理」にいたることなく、また物々交換の歴史的発展に手がかりを求めることなくして、いわば論理的に**形態Ⅱ**にから**形態Ⅲ**を導くことができるように思われる。」(224)

⇒そして「もちろん、そのためには、あらかじめ明らかにしたように、資本主義的商品であることを明確に前提しなければならないことは、ここで繰り返すまでもないであろう。」(224)と、ダメ押しがなされる。

6 価値形態論の方法

本小節においては、これまでの展開が、方法論の観点から総括される。

すなわち、これまでの議論は、3つに分けられるという。

「第1は、価値形態に先行して**価値の実体規定**が行われることに少なからず起因するものと思われるが、いわゆる「**転倒の論理**」による展開である。」(226)

「第2の見地は、価値形態の展開をいわゆる生産物交換、あるいは商品交換の**歴史的拡大・発展から説明**するのである。」(226)

*8「**形態Ⅳ**」とは、『初版・資本論』の「**本文**」のみに登場する形態である。先の「**転倒**」の論理が前提にあるが、「リンネルに当てはまることは、どの商品にも当てはまる」（『初版・資本論』大月文庫、75）として、**第Ⅲ形態**の次に、多数（無数）の**第Ⅱ形態**が示され、結局、**貨幣形態が導かれ**ないまま価値形態論が終わっている。これに対して、『初版・資本論』には「**付録、価値形態**」があり、そこでは、「**形態Ⅳ**」は示されず、「**貨幣形態**」で閉じている。なお、第2版『資本論』（現行版は第4版だが、第3版とともにエンゲルスが編集したもの。内容的には、第2.3.4版には大きな違いはない）では、第1章・第3節が「**価値形態論**」だが、そこには、『初版』「**付録**」の方が採用されている。こうしたこともあり、日本の価値形態研究は、微に入り細にわたるものになっている。

そして、「第3の見地は、商品の全面的交換の要求に基づいて、その商品の価値表現の展開として価値形態の移行を説明するものである。」(227)と。

すでに、紹介してきたように、先生はこの第3の知見こそが正しいものだと主張する。

⇒価値形態論を、商品の「全面的交換の要求」という性質を軸に展開すること、それが大内・価値形態論の要だといえよう。

⇒しかし、これもすでに多々指摘したことだが、後の『経済学概論』においては、ややクリアではないものの、このようには理解できない記述がみられる(むろん、そうでない記述もあるが)。

「この表現式(第I形態)は商品所有者の側からいえば、リンネルの所有者が2キロの茶を使用価値として手に入れることを欲し、そのために10メートルのリンネルを提供しようとして申し出ていることを意味するが、これを商品に即してみれば、リンネルの価値が茶という使用価値によって表現されることになり、したがって、リンネル10メートルが2キロの茶に値するということになる。この場合、量的な関係では、まず茶について、3キロではなく2キロという量が決められ、その上でそれに応じてリンネルの数量が決められることになる。なぜなら茶は差し当たり使用価値として交換の対象となるのだから、その量は欲望に応じて決まる、そしてリンネルはその2キロの茶を得るための手段として10メートルに定められるものともものだからである。」(『経済学概論』183)

この傍線部分などは、宇野の提起した、価値形態論に「商品所有者」を想定して、その「欲望」を価値形態論の要とするロジックといえよう。

そのように理解できるとすれば、いわば**第4の観点**があるのであって、それは宇野の提起を受け入れる方向にあるのでないか*9。

本書の刊行から『経済学概論』の発行までは、2年ほどの期間だが(むろん執筆の時期を考慮すれば単純にはいえないが)、その間に理論的な深化がもたらされたと思われるが、それを伺うことはできない。

*9 先生には、『資本論』関連の書物として、『資本論研究』全5巻(筑摩書房)、『資本論研究入門』(東京大学出版会)、『経済原論』(有斐閣)、『資本論を学ぶ』全5巻(有斐閣)などでの分担執筆があるものの、価値形態論の領域に関するものはない。唯一のそれが『経済学概論』なのである。